

第2回寝屋川市放課後子ども総合プラン運営委員会議事録

1 日時 令和6年7月18日（木） 午前10時から

2 場所 議会棟4階 第Ⅰ・Ⅱ会議室

3 出席状況

(1) 出席委員（10名）

杉本委員長、枡井副委員長、西脇委員、吉永委員、中村委員、宮地委員、糸見委員、山本委員、村上委員、谷口委員

(2) 欠席者委員 委員（5名）

井戸委員、清水委員、土保委員、山中委員、栗原委員

(3) 事務局（5名）

岡元課長、大橋係長、徳留、高岡、魚谷

4 次第

(1) 放課後のあり方

(2) その他

【放課後のあり方に対する 市民からの意見】

- ・「留守家庭児童会は原則年間を通じての利用であるため、夏休みなどの学校休業日だけ預かってもらえるような居場所を提供してほしい。」
- ・「公園ではボール遊びができないので校庭でボール遊びをさせてあげられないか。」
- ・「枚方のオープンスクエアのように送り迎えなしで少し遊んでから帰らせるような仕組みはないのか。」
- ・「放課後子供教室のプログラムとして、子どもや保護者からの意見で、夏休みに水遊びなどをして欲しいというものがある。」

【現状分析等】

- ・普段は午後3時までに仕事を終えて、留守家庭児童会を利用していないが、長期休業期間中だけは、一人で留守番させるのは不安なので入会できないかという相談が留守家庭児童会の現場にもあった。
- ・留守家庭児童会指導員と児童の関係やいつも従事している校庭開放にサポーター

と児童の関係のように、今まで築いてきた関係があるからこそ、保育や見守りができる。夏休みだけの関係では、保育や見守りが安全にできるのか想像がしにくい。見守り・預かりの場所が必要だと思うが、留守家庭児童会や校庭開放の延長線上として計画した時に、地域だけではできない。地域に振るのではなく、市や国で考えてもらう必要がある。

- ・総合教育研修センターにも夏休み期間中も受け入れてほしいという声はあがっている。子育て支援政策として将来的に進めていくべきだと思うが、どうフォローアップをすれば安全安心に受け入れることができるのか、限られた人員のなかで、あるいはボランティアの方に頼むというのではなく、ヒトモノカネをしつかりと整備しながら検討していくべきである。
 - ・ヒトモノカネで考えると、ヒト＝誰がやるのか、モノ＝場所をどこにするのか、カネ＝それらの予算を考え、お金を準備できるのか。
 - ・地域協働協議会でも子どもと触れ合うものづくりなどのプログラムを実施している。放課後子供教室でもスポーツ教室やものづくり教室を実施しているので、お互い協力できるところがあるのではと感じ計画しているところだが、夏休み期間中は活動していなかった。自校に持ち帰り実行委員の中でも検討したい。
 - ・長期休業日等の子どもの居場所づくりにおいて、学校の施設を使い実施を計画しても学校から反対が出ると思う。地域に振られてもシステムを構築するのが大変。そして、留守家庭児童会に振られるというのもすごく大変なこと。
- 留守家庭児童会で預かっている子どもたち約 2,500 人に、新たにスポットで 200 人、300 人が入ってきたとして、同じように扱うことが難しい。1 年間通じて保育しているので、限定期間のプログラムだけ参加しますとなっても、その子たちに時間をかけ、年間通じての利用児童が置き去りになってしまったら、本末転倒である。
- ・放課後子供教室のプログラムではないが、保護者から子ども達が集まって宿題等をする場所があればとの声があり、去年からコミセンで短期間の午前中のみ実施した。今後は、学習後実習室で料理などの体験活動と一緒に開催できれば新たなプログラムになると思う。
 - ・子どもたちの居場所を作っていくためには、親が関わる場を用意することが必要ではないか。また、安全な場所となれば学校がベースとなるが、教師に負担をかけない方法も含めて考えていくべきである。お金については、市がどれだけ予算をつけられるのか。
 - ・放課後子供教室のプログラムとして、熱中症アラートが発令されると校庭開放を

変更してスーパーボールすくいや水遊びに切り替えて実施している。

- ・校庭開放中に子どもがケガをした時に、校庭開放サポーターだけでは対応が難しいという声があった。ケガの場合どのように対応するのか、またどのように指示すればよいのか悩んでしまう。先生は、社会教育推進課に連絡し、対応を仰いだ。

【今後の方向性】

- ・例えば、子どもを預かる場合、保護者は預けるだけではなく、どう関わられるか考え、名札を必ず作るとか、必ずいつてらっしゃいと、預けに行くのではなく送り出すということを保護者に課すことも必要ではないか。その保護者も、自分の子どもだけではなく、他の子どものことも考えられるような社会になれば、地域で子どもたちを育てていくと気運が高めていきたい。
- ・地域の公園には子どもたちが集まっている。夏休みだと熱中症アラートが出ていても集まって遊んでいる。子ども・保護者の気持ちを考えると安心して仕事に行くことができない。学校の先生や地域のボランティア、留守家庭児童会指導員などに責任を押し付けるつもりはないが、学校や施設が受け皿となって誰かが見てくれる場があれば保護者も安心できる。
- ・この事業全部を地域だけに負担させるのは大変である。力を集めて、学校・地域で分担し、そして保護者も誰か預かってもらうではなく、参加できる日は見守る等の方法が実現できればよい。
- ・安全面について、海外の例だが、学校までは保護者の責任。学校内では子どもの責任である。学校は場を与えるだけで責任はほとんど問われない。日本の場合、施設に責任を問われるので拒否する。契約書を交わすなどして、認識を変えていく必要がある。
- ・子どもたちで自主運営できる力をつけていくことも必要ではないか。運営委員会のようなものを作り、例えば、高学年に、低・中学年の子の面倒を見るような、体験等で大人が手厚く何か教えたりするのではなく、子どもたちが主体的に動けるような場を用意して、子どもたちで運営する力をつけていくこと、これも放課後子ども総合プランのあり方ではないか。

【その他】

- ・6月26日(水)に放課後子供教室安全研修を実施。今後は秋頃に各放課後子供教室実行委員に集まっていただき、各種共有、交流を図るような研修の実施を検討。